

## 「ギリシア人の剽窃」に関する

### アレクサンドリアのクレメンスの見解

久山宗彦

アレクサンドリアのクレメンスの著「真の哲学に関する  
覚智説の雑録（刺繡・絨毯）（Titou Phlaviou Klēmē-  
tos tōn Kata tēn alēthē philosophian gnōstikōn hypo-  
mnēmātōn stromateis = Stromateis）」は、その名が示  
すように、個々のテーマをただ一つ一つ処理していくとい  
うことを目指した書物ではない。「ストロマテイス」の各  
部間では、互いに相反する重要な事柄が表面上はばらばら  
に語られているように見えることが多い。

しかし、「ストロマテイス」全体を通して感じられるこ  
とは、クレメンスは相異なるほぼすべての事柄をそれらの  
一つの源泉にまで探究し、その源泉からかれは導かれてい

るといふように言えるし、また逆に、源泉はクレメンスに  
よって浮き彫りされていくというように言えるが、いづれ  
にしてもそのような議論を提供してくれる場が「ストロマ  
テイス」であると思う。

ところでクレメンスの場合、重要な専門用語内にあつて  
も、既述したように、一見ばらばらの感じを与える意味の  
揺れがあるのである。この典型的な例は、クレメンスの  
philosophia という語の使い方によく見られる。以下はま  
ずこれについて検討していくことにする。

クレメンスは一般的に「哲学においても、それが部分的  
であっても成功している場合には、哲学のなかに存在する

真理に到達する能力を、われわれはしばしば哲学と称してきた」(philosophian pollakis eirekamen to kata philosophian epiteuktikon tēs altheias, kan merikon tyn chanei) と語っているが、この philosophia についてのかれの色々な表現を厳密に調べていくと、philosophia という語は多くの意味を許容していることがわかる。

私はクレメンスが philosophia を大きくほぼ三つの意味に使い分けていると理解しているので、それらについてコメントさせていただく。第一は、philosophia は一般にギリシア哲学という意味で使われているが、そのギリシア哲学は「ちっと(periptoseis)、あるいは漠然と(amydros)、かつまた部分的に真理に関係している」としている。更に、「ギリシア哲学のなかに現れてくる真理は局部的(merike)なものである」とか、諸々の哲学的学派は、ペントコステの際に肉の切り身をひったくる神の祭尼のようなものである、とクレメンスは述べている。

かようなわけでアレクサンドリアのクレメンスは、ギリシア哲学のうちの真理の断片を集めることも課題であるとしている。

クレメンスが philosophia について指摘する第二点は、

悪魔によって呪詛されるべきギリシア哲学も存在するということである。<sup>(6)</sup>クレメンスはエピクロスの哲学や詭弁哲学を大いに批判し、かような哲学は悪魔によって盗み取られた、悪魔からの賜物だとしている。<sup>(7)</sup>ただこうした哲学と相対する真理は、それによってのみ哲学の存在価値があるとクレメンスによって見なされる弁証法の助けを借りて、ソフィストから護られていると指摘している。<sup>(8)</sup>

第三点は、ギリシア哲学や非ギリシア哲学は一段劣った霊的力(dynamis)によって靈感が与えられた(empneusai)ということである。<sup>(9)</sup>

以上からクレメンスは、模索しながら哲学的・理性的に確証しようと絶えず意を用いる、漠然とまた部分的に真理に関与するギリシア哲学と、一段劣った霊的力——最後に触れることになるが、これは天使と言える——あるいは悪魔という超自然的・霊的存在からの哲学に対する働き掛け<sup>(10)</sup>という、二つの異なった型を問題にしているという風に整理することが可能となろう。これはクレメンスの最も基本的な捉え方のように思われる。

クレメンスは霊的力(dynamis)による認識を知性の予認(prolepsis)とはっきり区別している。<sup>(11)</sup>優れた哲学

者はかれの使命として靈感 (epinoia) が与えられ、また、ギリシア哲学の最も透徹せるもの (akribos) だけが神を見るのである。

悪魔が関与している部分を除けば、真理に部分的に関与するギリシア哲学と霊的存在からの哲学に対する働き掛けという、二つの異なった救いの源を問題にしていることになる。そしてこの二つの源は、結局は一つに繋がれていくものとクレメンスは見ている。すなわち、一方には *peitōsis physikē ennoia kolinos nous*、それに真理の反射光 (emphasis) によって達成される神の自然啓示に対する認識があり、他方では、特別の使命を受けた人に働き掛ける、超自然的・霊的存在からの特殊啓示に対する認識がある。これをクレメンスは予言 (proanaphoresis) と呼んでいる。

クレメンスはかように、啓示を自然啓示と特殊啓示に分けて理解した。そして、ギリシア哲学者に対する特殊啓示については、アレクサンドリアのクレメンスによってはじめて取り上げられたと言える。ギリシア人たちは自分たちの予言者を抱えていたとクレメンスは語っている。<sup>(12)</sup>

*philosophia* は一般にギリシア人がその代表のようにク

レメンスが述べていることは既に指摘したが、自然啓示に対する認識にしても特殊啓示に対する認識にしても、それは律法と同じく神の摂理として与えられているとする。そしてまた、旧約も新約も真理そのものの差ではなくて、神の *oikonomia* のなかでの摂理啓示の進化の各段階を表しているとしている。

旧約、すなわちユダヤ哲学が以上のようなのであれば、ギリシア哲学もまた真の哲学、すなわちキリストの哲学を受け入れるための準備として、神が人類を教育する手段にしたのではないか、とクレメンスは述べている。更にかれは、哲学はイエス・キリストを準備するものとして摂理によって授けられたということを受け入れることは愚かなことではないとも言っている。<sup>(14)</sup>

神は旧約とギリシア哲学の二つの契約 (*diatheke*) に<sup>(15)</sup> よって人類を教育し、福音の準備をさせるといふ思想は、クレメンスのほぼ全著作に浸透していると言っても過言ではなからう。クレメンスは弁証学者の思想を発展させて、ギリシア人の哲学とユダヤ人の律法とキリスト者の福音の三者の関連を求めたのである。<sup>(16)</sup>

ところで、今から、既述したギリシア哲学者に対する神

の特殊啓示についての論——これを (イ) とする——をもう少し進めることにするが、このなかに押し入ってみると、そこではプラトン・ピタゴラス・ホメロスなど、霊的存在から特殊啓示を受けた者も、ユダヤの宗教哲学や全く古い異教世界の哲学より重要なドグマは借用していたという議論に展開していつていることが判明する。これを (ロ) とする。そして更にこれと併置して、指摘した特殊啓示であるユダヤ宗教哲学・異教思想より、一般にギリシア哲学、取り分け、詭弁哲学などは剽窃 (κλοπή) という行為をなしたと貶す捉え方が登場してくる。これを (イ) とする。このギリシア哲学の剽窃という問題が本論のメインテーマであるが、その前に (イ)、(ロ) について少々コメントすることにする。

まず (イ) についてであるが、私は、クレメンスが卓越した (enaretōi) ギリシア哲学者には神聖な epipnoia が与えられ、ギリシア世界 (異邦人世界にも通じる) における一種の予言者であったと述べたが、しかしクレメンスは、同時代の最近の (neoterōi) ギリシア哲学者に対する批判と、最も古い時代の (palatatoi) 哲学者に対する称讃のこ  
とばでもって「ストロマテイス」を書きはじめ、<sup>(17)</sup> epipnoia

が与えられた哲学者について次のように言及するのである。  
「プラトン及びピタゴラスは神の大きいなる援助を受けて (ouk atheoi)」、占いの一種の幸福のことは (manteias eustochou phene) を手段として真理と出会い、真理は少なくとも部分的に (kata mēre) 知らされる。<sup>(18)</sup>」更にクレメンスは「ホメロスは予言する (manteuetai)」と簡潔に記している。

次に (ロ) についてであるが、これは (イ) で記すこととなるギリシア人・ギリシア哲学者の剽窃の問題が中心的に扱われる「ストロマテイス」五部八十九章からの前で、ギリシア哲学者の依存性の問題としての関連で取り上げたいと思う。

以下は、「ストロマテイス」五部二十章三節から四十章までのグループにしても、五部四十一章から五十四章までのそれにしても、前者はそれぞれ、最終の後者 (≡旧約聖書) に依存しているのではないかという、依存性についての構成がほぼ同じ順序でクレメンスによって二度繰り返し返される箇所であるが、これについての引用には私自身少々のためらいはあるものの、クレメンスにそって取り上げることにした。

エジプト人	Strom.	V 20	3	21	3
ギリシア人		21	4	25	1
ピタゴラス学派の人たち		27	1	30	2
異邦人(非ギリシア人)		31	3	31	5
旧約聖書		32	40		
エジプト人	Strom.	V 41	43		
異邦人(非ギリシア人)		44			
ギリシア人		45	50		
そしてピタゴラス学派の人たち		51	54		
旧約聖書					

異邦人(非ギリシア人)の順番が両グループ間では異なっているが、他は同じ順番で登場する。

この一覧表から考えられることは、新約聖書に先行するものについては、最終的には旧約聖書に依存するという、そんな依存性についてクレメンスが指摘していることがはっきりしてくることである。ユダヤのものでない色々な異教の叡智に対する旧約聖書の優越性は、真理の消化の段階という点から見られているのであって、クレメンスは旧約聖

書を異教(*barbaroi*)のなかの古典のように見ていると言ってもよからう。なお、ここでは、新約聖書に先行するもの新約聖書への依存・類似という問題は除外されている。ただクレメンスは「ストロマテイス」<sup>(20)</sup>で、基本的・潜在的にすべてのものの新約聖書への依存・類似がなければ、指摘した旧約聖書への依存・類似ということは問題にならないであろうと語っている。

ところでクレメンスは既述したようにギリシア人の *barbaroi* —— しばしばユダヤ人をも意味するが、一般的には勿論、ギリシア人でない人たちを指している——への依存性について扱っているが、これは年代学<sup>(21)</sup>と深い関係がある<sup>(22)</sup>。

クレメンスはこの時代の信仰でもあるところの、より古いものこそ新しいものの源であるという考えに従い、ユダヤの宗教は年代的に最古であるがゆえにギリシア哲学の起源である<sup>(23)</sup>、と言っている。クレメンスはまた、非常に古い(*presbyteroi*)哲学者の大部分は *barbaros* の民族であると述べ、且つまた、ピタゴラス・オルフェウス・ホメロス・タレースなどは *barbaroi* の下で研究したとして、次のように述べている。

「タレースはエジプトの予言者を頻繁に訪問した。ピタゴラスは聖所 (adyta) に入って神秘思想を学んだ。かれは更にカルデア人やペルシャ人の呪術者たちをしばしば訪ねた。プラトンはエジプト出身であり、哲学のなかで最も優れたものは *barbaroi* から生じたことも否定しない。<sup>(24)</sup>」

ところで、かような年代学や依存性の問題から、クレメンスが語るギリシア人の剽窃 (Klope) の問題 (II) が生じてくることになる。クレメンスの場合、何と言ってもこの問題を話題にすることに慣れているようである。そしてほとんどは、著作家のだらしなさの状況を越えたところでの議論である。

クレメンスは剽窃についての、言わば精神的な問題と関わったのであるが、この剽窃問題は、恐らくアレクサンドリアの問答学校での課題ではなかったかと思われる。

また「ストロマテイス」においては、第五・第六部になって漸く剽窃の問題が本格的に扱われることになるが、特に「ストロマテイス」五部八十九章一四一章にそれが集中している。

更に少々剽窃についてのコメントを続けるが、「ストロマテイス」では、集中的に記されている前記の箇所のこと

<sup>(25)</sup>で、今度は一転してギリシア人についての実に素晴らしいキリスト教への改宗という事柄 (Ja paradoxa) の描写になっていたり、他方、「ストロマテイス」二部の最初のところでクレメンスは、剽窃についての自らの考えの正当性を手短かに述べながら、そのあとでは急に一部の別のテーマに戻ったりしている点から見ると、クレメンスは「ストロマテイス」の二部から五部にかけては、剽窃という一貫した重要なテーマではあるものの、この一つのテーマに絞って論じたいとは思わなかったことが分かる。

ところで、ギリシア人の剽窃、ギリシア哲学者の剽窃ということばが何故用いられるのかと言えば、かれらは受け取った (あるいは借用した) 思想を、これは自分たちにとつて固有のものであると偽証したり——このことは換言すれば、ギリシア人の大半の哲学者たちは、自らの依存性を認めなかったことを意味する——その上更に、借用したものを純粋に保持していったわけではなかったので、哲学者たちの大半は予言者とは対照的に、剽窃した盗人であったと指摘されることになったのである。クレメンスは次のように語っている。

「ギリシア哲学がヘブライの予言者から受け取った *dog-*

theia の分け前 (mere) を、悉く了解 (epignosis) したわけではなく、各々のギリシア哲学は、それら固有の学説の如くに自己に適應させたのである。従ってギリシア哲学は、一方ではユダヤの原理を變形させ、他方では、このユダヤの原理を不当に解釈したのである。」また「ギリシア哲学は剽窃したところのものを——かようなユダヤの原理はユダヤ人たちが神的衝動によって語っているのに——不当に了解したのである。ギリシア哲学はユダヤ原理を完全に消化したわけではなかった。そして、推測にか推論によって受け入れられたものは、全く意味のないものになってしまった。」<sup>(27)</sup>

実際、形容詞の philantos (利己的な)、名詞の philautia (我欲) が関係する剽窃ということの重大さは、剽窃という行為そのものから生じるのではなく剽窃という行為が認識されていないという事実から生じるのである。事実、神からやってくるところの真理は、かれら自身から生じたとするギリシア哲学者によって取り扱われることになる。ところが、かような態度は正しく自愛 (philia) そのものであり、このことによって、人間は神からやってくるものを我が物とし、且つまた、識別 (eucharistia) とは

正反対であるものを我が物としているのである。

哲学者の誤謬は自愛 (philia) であり、換言すれば、普遍 (katholikos) に対して自分自身の能力を發揮して、こうとする自負心なのである。<sup>(28)</sup> この問題は既にフィロンも扱っている。<sup>(29)</sup>

クレメンスは同じ問題を次のようにも述べている。すなわち、ギリシア哲学者たちは予言者の認識とは違った遺り方で神認識を行ったので、神は哲学者たちの賢明さを愚行に置き換えになった。なぜなら、固有の考えに凝り固まったギリシアの賢者たちは、神の子は人を通して語られたこと、神には子があったこと、そしてその子は苦しまれたこと<sup>(30)</sup> ということをお伽噺としか見なさなかったからである。ここでは、ユダヤ人に対する忘恩 (philia) 以外に、ユダヤ人の教えをもたらした神に対する忘恩が存在する。それゆえ、クレメンスの務めは、ギリシア人・ギリシア哲学者に対して、かれらの忘恩からかれらを免ずるために、<sup>(31)</sup> かれらが真理を既述したような形で剽窃したということを明確にする必要があったのではなからうか。

「ギリシア人の忘恩 (philia) は、人間としての教師のみを問題にしている」ところからくるともクレメンスは

述べている。

クレメンスはギリシア人の剽窃に伴う作品について、それはどこから来ているのか出来るだけよく調べることが重要だと語っている。そしてまた、予言者とは対照的にギリシア哲学者らは盗人であったが、主はそのことをよくご存じでありながら禁じることなく、このギリシア哲学者の剽窃を善事へと変えていかれた<sup>(33)</sup>と述べている。

さて、クレメンスは、プラトン・ピタゴラスなどに至るまで、剽窃の実態を明らかにしていこうとする。かれによれば、モーセや旧約の予言者たちの教えは、キリスト以前千三百年以上のものであって、プラトン・ピタゴラスよりも古い。それゆえ、ギリシア哲学者たちはモーセの教えを学んで一種の予言者的なことを律法書から引き出した<sup>(34)</sup>ということである。

プラトン・ピタゴラスなども、クレメンスは剽窃したギリシア哲学のなかで考えていくことになる。これに関してクレメンスは「プラトンやピタゴラスは、ほとんどの重要なドクマや高貴なるものを、どのようにして非ギリシア人(Barbaroi)より学んでこれたのか、それについてはプラトンが思い出さざるをえないはずである」と言っている<sup>(35)</sup>。

ギリシア哲学者は、かような最も重要な説教を、それに対しては感謝もしないで、モーセ・予言者から抜き取ったのである<sup>(36)</sup>。

だがクレメンスは他方で、「ギリシア人の恩知らずの剽窃(Philonon Kopen)と、かれらが自分なりに把握した最良の教えを自己に適応させるその方法を、詳細に指摘することは大変困難である<sup>(37)</sup>」とも言っている。

さてここで、「ストロマテイス」一部く六部に登場するオルフェウス・ピタゴラス・プラトン・ヘラクレイトス・ストア・ギリシアの倫理・音楽・グノーシスといったギリシア哲学(者)などの旧約聖書からの剽窃とみなされる具体的な例をいくつか以下に挙げていくことにする。

例えばピタゴラスについては、「ストロマテイス」二部<sup>(38)</sup>で、ギリシアの賢人とピタゴラスはアブラハムを模範として、「神に従いなさい」と語ったと記されている。また「ストロマテイス」同部<sup>(39)</sup>では、格言の書十一・一の「神はいつわりのはかりを憎しみ、正しい重りをよるこばれる」に倣ったピタゴラスのことば「さおばかりのさお、すなわち、正当にひかれた境界をこえないように<sup>(40)</sup>」が記されている。更に「ストロマテイス」四部<sup>(41)</sup>では、旧約聖書に依存し



ていたピタゴラスが縷々描写されている。

次にヘラクレイトスについてであるが、「ストロマテイス」二部ではかれのことば「思いがけないことは期待しないのであれば、それは掘り出しがたく、見つけどしがたく、到着しがたいものなので、見つけ出すことにはならないであらう」<sup>(43)</sup>が引用され、これはイザヤの書七・九の「だが、もし私を信じなければ、それを押しとどめえまい」を書き直したものであるとクレメンスは言っている。クレメンスは更にヘラクレイトスの「『受け入れようとしない姿勢で傾聴し、論じたりしないような姿勢で耳を傾けるように』<sup>(44)</sup>ということばに非難をあげている」ということばを引用し、この見方はソロモンの集会の書六・33の「あなたが聞くことを好めば、学ぶことが多く、耳を傾ければ、聡明な人となる」の影響があったと語っている<sup>(45)</sup>。

ストアについては、かれら哲学者たちは哲学の目標を律法より取り出したが、かれらは神の位置に自然を置くようにした<sup>(46)</sup>とクレメンスは語っている。

またギリシア人の倫理については、例えば、かれらの勇気・節制・智慧・正義・持久・忍耐・礼節・克己・敬虔といった徳はすべてモーセに負うところが大きくであるとクレメ

ンスは述べる。

グノーシスについては、グノーシスの捉え方はギリシア人より出てきたものではないと、クレメンスはギリシア起源説をきっぱりと否定している<sup>(48)</sup>。

更にここで一寸付け加えるが、いわゆる剽窃の名に最も似つかわしいのは、ソフィスト・詭弁哲学であって、クレメンスは「ストロマテイス」一部で *sophistikos-sophizo*・*sophistes*・*sophisma* などの語を挙げながら強く批判している。

以上、ギリシア人・ギリシア哲学者に見られる剽窃の具体的な問題を扱ったのであるが、クレメンスは「ストロマテイス」<sup>(49)</sup>五部では以下に記すヨハネ福音書十・一―三を引用し、剽窃とは何かについて深く考えさせてくれる。「はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないではかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す」と。

既述した通り、クレメンスは哲学を古代ギリシアの賢人まで遡って考えたばかりでなく、古代ギリシア人を越えて

かれらに先んずる他の異教の世界の人たち、そして旧約聖書にまで遡って考えたのである。一般にかなり複雑な思惟方法を展開するクレメンスが、今回のテーマの場合、見方によっては、かれはかなり単純な捉え方をしていると理解することも出来ようが、このような捉え方をクレメンスが実際やりえたのかどうかという疑問が残らないではない。ただここでクレメンスが、ギリシア哲学に対する聖書の智慧の優越性を証明しようとしていることは明らかである。

クレメンスは哲学の源泉についての論述で種々様々の賢人を次々と呼び出して、次のように結論を下している。

「哲学は偉大な役立たず事柄として、昔 (patē) から異教の世界の人たちのもとで盛んとなり、かれらを照らし、ついにギリシア人のもとに達した。最初の創始者と言えばエジプトの予言者、アッシリアのカルデア人、古代ケルト人の僧であるドロイダイ (Hoi Dryidai)、ガラテア人のところにはいたサマナイオイ (Samanaioi)、バクトリア人、ケルトの哲人、ペルシアの呪術者——かれらは救い主キリストの誕生を予言し、星の光に導かれてユダヤの国に達したのである——そして、インドのバラモンの裸の行者と、ほかの異邦人哲学者を挙げるができる。——またイン

ド人のなかには、仏陀 (Boutta || Bouta) の教えを信奉する人たちがいる。かれらは仏陀の神聖性の優越ゆえに、あらかも神を崇拜するのよう(50)に仏陀を崇拜していた」。

さて、最後の問題に触れることにする。

philosophia は一段劣つた dynamis (霊的力 || 天使) によって靈感が与えられた (empneusai) ことについては既に述べたが、この考えはクレメンスの思想においては副次的なものではなく、むしろ実に重要な役割を果しているのである。

神から人間への哲学の到来についての天使の仲介を話題にするクレメンスは、同時に、哲学を低次の天使を通してお与えになったロゴスのことを語っている。転んだ天使が、かれらが知っている秘密を伝えたというのである。(51) クレメンスはこの天使の役割について以下のように述べている。

「人間の epinoia は神聖な epinoia から生ずる。この epinoia が人間に与えられるのは、人間に直接接触している (proseches) ところの天使の仲介によってである。

その時には魂は受け入れ準備ができており、そこに神聖な意志が働き、且つまた神の使い (leitourgoi) が奉仕する」(51) と。クレメンスはまた、各民族・各国民の智慧と天使と

の間には相関関係が存在するとして、既述したような「哲学は偉大な役立つ事柄として、昔から異教の世界の人たちのもとで (kata ta ethne) 盛んとなり、かれらを照らし、ついにギリシア人のもとに達した」と語っている。

このような捉え方は、ユダヤ・キリスト教起源のもので中期プラトン派思想起源のものでもなく、クレメンスの根本思想の一つである。これは救いの歴史に与る天使の役割を問題にしているのである。救いの歴史においては、天使は「みことば」の活動に先んじているので、まずは旧約聖書や異教徒たちの律法のなかで働き掛ける。それゆえ、ギリシア哲学においても、それが同じく救い主、キリスト・イエスの到来の *propaideia* である以上、そのなかでも働き掛けるのである。<sup>(9)</sup>

以上、アレクサンドリアのクレメンスによるギリシア人・ギリシア哲学の剽窃の問題を中心に扱ってきたのであるが、ギリシア哲学についてのクレメンスの考え方で特徴的なことは、ギリシア哲学には全体的に剽窃の問題があるとしても、旧約・新約の啓示には、剽窃したギリシア哲学と和解除していくことの出来る道筋があることを、クレメンスは論じたかったのだと思う。

## 注

- (1) Strom. VI, 160.1.
- (2) Strom. I, 16, 80.5.
- (3) Strom. VI, 10.82.2.
- (4) Strom. I, 13.57.1.
- (5) Strom. I, 57.6.
- (6) Strom. I, 16.80.5.
- (7) Strom. VI, 66.1.
- (8) Strom. VI, 84.4.
- (9) Strom. I, 16.80.5.
- (10) Strom. VI, 156.1 では哲学は分有する霊とされ、Strom. VI, 156.3~160 では、神が哲学をお与えになった点が述べられてゐる。
- (11) Strom. V, 14.133.9.
- (12) Strom. VI, 42.3.
- (13) Strom. I, 5.
- (14) Strom. VI, 153~154.
- (15) Strom. VI, 8.67.1 で、クレメンスは、哲学はキリストの哲学に至る一つの段階 (hypobathra) である特別の契約 (diathēke) としてわれわれに与えられていると語る。

- (16) Strom. VI.5, 「唯一の神はギリシア人によってはギリシア人(異邦人)的に知られ、ユダヤ人によってはユダヤ人的に知られ、われわれキリスト者によっては、新しく靈的方法によって知られた」。
- (17) 八部一章。
- (18) Strom. V, 5.29.4.
- (19) Ped. I, 6.36, 1. (教育書)
- (20) 五部三十一章一節。
- (21) Strom. I, 59. ~ I, 80.4.
- (22) Strom. I, 101. ~ I, 147.
- (23) Strom. I.15. ガラツィア人への手紙 3・19にも「それではなぜ律法があるのか? それは、違反あるがために加えられたもので、約束された子孫が来られる時までのものであり、天使たちによって、仲立ちの手を通して布告された」とある。
- (24) Strom. I, 15.66.2.
- (25) 特に Strom. VI, 28 ~ 38.
- (26) Strom. I, 17.87.2.
- (27) Strom. VI, 7.55.4.
- (28) Strom. VI, 7.57.1.
- (29) Strom. I, 17.87.7.
- (30) Strom. V, 87.2 ~ V.88.
- (31) Strom. II, 1.2.3.
- (32) Strom. VI, 7.58.3.
- (33) Strom. V, 81.1 ~ 5.
- (34) Strom. V, 5.29.3.
- (35) Strom. I, 68.2.
- (36) Strom. V, 10.1 ~ 3.
- (37) Strom. VI, 2.27.5.
- (38) Strom. II, 69.4. ~ 70, 1.
- (39) Strom. II, 79.2.
- (40) Diog. Laert., VIII 18.
- (41) Strom. IV, 9.1.
- (42) Strom. II, 17.4.
- (43) Fr. 18. Diels-Nranz (Die Fragmente der Vorsokratiker).
- (44) Fr. 19. Diels-Nranz.
- (45) Strom. II, 24.5.
- (46) Strom. II, 101.1.
- (47) Strom. II, 78.1. 42y°.
- (48) Strom. V, 69.6.
- (49) 八六章、四節 ~ 八七章一節。
- (50) Strom. I, 15.71.3 ~ 5.
- (51) Strom. VII, 6.4.
- (52) Strom. VI, 17.157.4 ~ 5.
- (53) Strom. VI, 17.161.2 ~ 3.

## II 討論 II

加藤信朗

お話の出発点として申し上げるが、クレメンスの主著『ストロマテイス』は「絨毯」あるいは「刺繍」という意味であるとおっしゃったが、眺めただけでも入ってゆきにくく、見極めのつきにくい著作のように思える。

そこでまず『ストロマテイス』という書名についてうかがいたいのだが、この頃あるいはヘレニズム時代からアレクサンドリアにおいて、*doxography* あるいは *epitome* という書名の著作がギリシア哲学者の見解の要約あるいは哲学史として盛んであったとは聞いているが『ストロマテイス』という書名は、今日知られているものとしてはクレメンスのものだけのような気もするのだが、この時代、ある程度一般的に使われていたのであろうか、それともクレメンスがあえてこのような書名を使ったということであろうか。

久山宗彦

『ストロマテイス』の正式な著作名は『真の哲学に関する覚知説の雑録』であり、略して『雑録』という書名にしたりするが、原義は「刺繍」あるいは「絨毯」という意味であろう。この時代においては、私の知る限り、アレクサンドリアのクレメンスだけがこの書名を使っている。古代ギリシアの哲学の中でも、この言葉が使われているとは思わないが。

クレメンスの場合、彼の三部作は『プロトレプティコス』（ギリシア人への勧告）、『パイダゴゴス』（教育書ないし師伝）、そして『ストロマテイス』という順序になる。最初の『プロトレプティコス』では、偶像を排し、受肉したキリスト・イエスに付き従って行くようにという勧告がなされる。

こうしてキリスト教の信仰を持たせ、次に『パイダゴゴス』においてキリスト教徒としての生活倫理を確立させる。そしてキリスト教の信仰が単純な信仰に留まることなく、彼が理想としたグノーシス的なキリスト教信仰を扱うのが『ストロマテイス』である。そのなかで「剽窃」の問題が同時に扱われているということである。

## 加藤信朗

『プロトレプティコス』ないし『パイダゴゴス』は分  
かりやすく、特に『プロトレプティコス』はプラトン以降  
と言っても良からうし、アリストテレスもこの名の書物を  
残しているため、ある意味でギリシアの伝統のなかにある  
定まったタイプだと思う。だが、『ストロマテイス』とい  
うのは「雑録」という意味では、すなわち哲学者の学説集  
という意味では、そういう書物が集められていたというこ  
とがあると思う。論駁・異教論駁といった形で書かれてい  
るものの場合、それはまたはっきりしているわけであるが、  
諸説を集めたものを雑録にしてゆくうちに、あちこちに図  
柄が出てくるといったことは、もしかするとそういった着  
想があって書名が出来てきたのかも知れないと思う。その  
当時、ペルシア絨毯や刺繍といったものは既にあったと思  
う。そういうものを書名として使ったという点が、クレメ  
ンスの天才的な閃きであったと思うのだが、まさにそういっ  
た書名が初期教父の代表者であるクレメンスによって用い  
られているということが、教父の時代が抱えていた主題で  
あったと考える。

すなわち、諸説が地中海全域にわたって存在するなかで、

イエス・キリストの福音の意味を明らかにしてゆくという  
課題である。収録のうちに図柄が現れるといった発想、特  
にそれが彼の主著と言われる点は、今日我々が生きてゆく  
上でも重要な意味を持っているのではないかと思う。

## 泉治典

いま刺繍の図柄といったことをおっしゃったのだが、世  
界史・文化的なコンテキストの問題——それがクレメン  
スの明らかにしたかった眼目であるかどうかは別として——  
、そういった問題も取り上げることができないのではない  
かと思うのだが、その場合、一番古いものと言えばカルデ  
ア人やエジプト人など、ヘブライ以前になる。ギリシア哲  
学はそういうものにも学んでいる。そしてその後で、ユダ  
ヤ人から特に律法を学んだということになる。

すると、ユダヤ教の方から言うと、ユダヤ教というのは  
世界で一番古いものではなく、それ以前に様々なものがあ  
るが、そういう様々なものを啓示ということによって神の  
知恵として整えてゆく、すなわち、あるものを切り捨て、  
整理し、立派なものを作り上げてゆくことがあると思  
う。そういったユダヤ人の知恵というものを通して、ギ

リシア哲学も後に、単なる異教的なものではなく、福音を準備するものとなったという筋が考えられると思う。すると最古の文明、ユダヤ教というものを通して浄化が行われてゆくことになり、ユダヤ教の働きとしては二つあり、一つは直接にキリストを予言するという働き、特殊啓示を指し示してゆく働きである。もう一つは一般啓示あるいは自然神学と言うべきか、そういうものを整えてゆく働きであると考えられる。そうなると、文化史のコンテキストとしてもなかなか複雑なものになるのではないかと考えられるが、その点いかがであろうか。

こう申し上げるのも、十二世紀のサン・ヴィクトルのフォーゴーあたりになると、エジプトだとかバビロンの知恵は顧みられなくなり、旧約の知恵が人類最古の知恵であり、アブラハムが人類最古の出発点だというふうに見える。そしてキリスト教がギリシア・ローマの世界を経て西欧に入ってゆく途中、ギリシア・ローマ文化を取り入れるなかで、より内容を充実させていったと考える。こうなると世界史も単純化し、近代のヨーロッパでは、例えばヘルダーのようにな、ヘブライ語が人類最古の言語であると見る考えも登場し、話が単純化するのだが、クレメンスあたりではそういっ

た単純化はなされていないという気がするので、そのあたりのご意見をうかがいたい。

#### 久山宗彦

同感である。クレメンスは「哲学史の哲学」ともいうべき部分を大きく問題として取り上げる。つまり福音の前の旧約、異教の世界、ギリシア哲学・思想といった部分を、いかに思想史の哲学として明確に打ち出しているかという点を考えていたと思う。

#### 泉治典

ギリシア哲学について、哲学のすぐれた面と悪しき面とが問題になるのではなからうか。優れた面は、哲学するということが真理の探究であるということで、優れた哲学者は真理に限りなく近づいていったと言える。他方、哲学というものは劣った天使から最初の知恵を得ているともされて、哲学のなかにはそのように、限りなく真理に近づいてゆく面と、他方、真理から遠ざかってしまう面とがある。そのあたりのことをクレメンスは知っていたのではないかと思う。そうすると、哲学の中でも（福音の準備をする上

で)よき働きをするものと、むしろ神に逆らうものがあり、その場合に、グノーシスをどのように見ていたのであるうか。グノーシスとは、悪い意味で強い二元論を持ちながら歴史・啓示などによらずに世界を直接了解するような道であったと思うのだが。そういった哲学をクレメンスはどのように考えていたのだろうか。

### 久山宗彦

最初の問題についてであるが、霊的な存在は素晴らしい方では「天使」であり、天使と哲学の関係では、「哲学は次元の低い天使と関係している」という表現がクレメンスの中にはある。悪い方になると、サタン(悪魔)Ⅱ脱線した天使の方からのギリシア哲学に対する関わりというのが出てくる。これはクレメンスにおいて区別されて出てくる。

二番目の問題、グノーシスについてであるが、クレメンスは様々なグノーシスをよく見ていて、良く分らないような部分もあるが、グノーシスに対する基本的な考えとしては、グノーシスをキリスト教思想の中で、非常に重要なものとして位置づけてゆくということだと思う。先程『ストロマテイス』に到る彼の著作の順序を挙げたが、『ギリシ

ア人に対する勧告』では、*phile pistis* を提示し、偶像を破壊するように勧告し、次の『パイダゴゴス』を通じて『ストロマテイス』において、最終的にはキリスト教的なグノーシスに支えられた信仰を問題にしている。単なる信仰とグノーシスのな信仰には、信仰の面では差がない。ただ、単なる信仰からキリスト教的な真のグノーシスへと向かうように我々は努力せねばならないという言葉があるが、それは、信仰のなかでも進歩・探究 *seeks* が必要だということ主張である。単なる信仰を得たところから、信仰のなかでも進歩・探究が問題になってくる。

こうして、グノーシスのな探究というものが信仰のなかで位置づけられながら、信仰の中身を深めてゆくことが重要となる。彼が目指したのはキリスト教的なグノーシスであり、これが最も素晴らしい段階であるとされる。

確かにグノーシスについては様々なグノーシスがあり、キリスト教の信仰と形が似ていて紛らわしい。しかし、自身は非難されるべきものであるとして、警戒しつつ、またさらにグノーシスのな深い発想を信仰のなかに取り入れて、さらに信仰を深めるために用いるといったことであろう。



## 加藤信朗

泉先生から根本的な問題を提起して頂いた。

第一の点は非常に啓発的であり、文化史的ないし文明史的コンテキストというものについて——哲学であれ宗教を含めて全体的な見取り図、これはオイコノミアの問題になるであろうが——興味深く拝聴した。まさに刺繍とか絨毯の問題に関係があり、絨毯・図柄には「反転図柄」(e.g. アヒルーウサギ)というものもありうると思う。これは非常に興味のある点で、ヴィクトル・フーゴーまで引かれて、十二世紀まで行くとそういった形になってくる。

私は最近、西欧 (occidental Europe) というのは far-occident 「極西」と言ってもよいのではないかと思っている。先程のお話をうかがっていると、クレメンスの場合にはカルデアだけではなく、インド・ウパニシャッドのことも問題になっていたようであるし、仏陀のことも出てくる。それは中央アジアにつながっていたわけで、そこから中国・日本までも含めて、アジアの文化圏まで問題にすることができる。そして、アジアの方まで持ってくると図柄が変わってくる。図柄が変わってきたなかで、ヘブライズムはどうなってくるのかという問題がある。書物の題名そのものか

らして、そういったパースペクティブを持っているということが、時代的な使命・時代的な状況であったといえると思うが、同時にキリスト教の持っている超越性が、文明のなかで人間のうちにあるときに、必ずそういう形を取ってくると思う。常に新しい図柄を見いだしてゆくという努力が要請されてゆく。そういう意味では非常に興味深い。

ギリシア哲学でも、プラトンの哲学あるいは他の哲学が、純粹にギリシア起源のものであるのか、あるいはそれ以前の文明に依存しているのかという問題が、ヘレニズム起源と東方説に別れるという点である。ピュタゴラスやヘラクレイトスにしても、相当に東、すなわちギリシアとして確立して以前からの知恵との関わりが出てくるであろう。

ヘブライズムそのものも、実は新しい一つの何かであり、以前の知恵に関わっていた。それは『箴言』、そしてその他にソロモンも入っているということもあり、『箴言』の知恵というものはかなり東の方につながっている面がある。極西の方から見えてきたキリスト教とは違った図柄が、極東の方からみた場合には出てくる。そういう意味ではアレクサンドリアは豊かな町であったと思うし、ヘラクレイトスにしても、我々は断片として知っているが、クレメンスの

時代にはまだ残存していたのではないかとも思う。われわれには失われているものがまだ幾らか、少なくとも伝承としてはあったかも知れない。

第二点、グノーシスの問題については、柴田さんが *Dei Patris* なのだが今日はいらっしゃらず、残念なのだが、二世紀前後のグノーシス主義の問題、それとの関係でキリスト教の正統教義が建てられてきたということが教科書的には学ばれてきたわけであるが、グノーシス主義そのものをそれほど明確にすることができないという面もあり、それは柴田さんあるいは荒井さんその他多くの方々がやっていらしたことであるが、その問題を考えたときに、今のお話がどういうように位置づけられてくるのか。泉さんが言われたような、哲学のなかに真理に限りなく近づいてゆこうとする一つの方向と、離れてゆく方向性——久山先生のお話のなかでは *phylantia* という形で出てきたと思うが——とが生じてきたときに、何が生ずるのか。この点は、言わばある種のディアレクティークを含み、興味ある問題点が指摘されていた。

#### 久山宗彦

いま加藤先生、泉先生のお話で感じたことだが、クレメンスは確かにインドまで視野に入れて語っていると思う。彼の師パンタイノスがインドまで行っていたのではないかとされているので、グノーシスの問題は具体的にその面からも考えられる。仏教について、キリスト教の思想家のなかで書物の中ではじめて紹介したのはクレメンスだと言われている。

当時のアレクサンドリアはローマ帝国領内のエジプトの地にあって、このユダヤ人の共同体では七十人訳のような仕事もなされていた。またギリシア人も多く、さらにペルシアやインドの商人などもアレクサンドリアに来ていた。言わばグノーシスを含めた「諸宗教・諸哲学の哲学」が、キリスト教の福音によってまとめられてゆくということではなかったかと思う。

#### 高島慶子

文化史的な流れの中で、クレメンスがこのようにギリシア哲学などを肯定的に受容してゆくのに対して、キリスト教徒のなかで敵対者がいなかったのだろうか。私は十二世

紀のシャルトル学派をやっているのだが、シャルトルのティエリーなどはプラトンの考えにそって *Waltseale* (世界靈魂) を聖靈と同一視し、コンシユのグエイヨームは「同じと言う人もあるし言わない人もあり、私はコメントしない」と言ったりして逃げるが、当時の権威から異端とされるといった状況があった。十二世紀あたりの宗教会議は強力で、プラトンやグノーシスと言わないまでも、ヘレニズムやギリシアの文学を取り入れることに対しては敵対者が多い。クレメンスのような初期の時代にあつては、異教を取り入れることによるタブーはなかつたのだろうか。

#### 久山宗彦

有名な話であるが、クレメンスと同時代のテルトゥリアーヌス(現在のチュニジアにいたラテン教父)は、「ギリシア哲学は悪魔の贈り物である」として、「キリスト教がやってきたからにはアテナイは問題ではない。エルサレムとアテナイは何の関係があるか」という言葉を吐いて、ギリシア哲学を軽視したと言われる。クレメンスもアレクサンドリアにおいて、同じ体験をしていた。しかし時代は、キリスト教徒は無知の集団と見られていた時代でもあつた。

それに対して真のキリスト教哲学を伝えてゆくことを目指し、詭弁哲学などによって吹き飛ばされるようなキリスト教ではなく、弁証法的な哲学を大いに取り入れて、キリスト教の確固としたものを土着させてゆきたいというのが、クレメンスのアレクサンドリア教校の校長としての狙いであつたと思う。ただ、テルトゥリアーヌスの素朴な信仰は、クレメンスの最終的な目的地とはおそらく同じであつたかと思う。ただ二人の真の信仰への道の相当の違いは、ラテン教父とギリシア教父の違いと言ふべきかとも思う。

#### 戸田聡

クレメンスはバラモンや仏陀に言及しているということであるが、そういった彼の知識の源泉はどこにあつたのだろうか。彼自身が現実にアレクサンドリアにおいて仏教徒たちを見て発言をしたのか、それともパンタイノスの説を通してそういったことを言ったのか。修道制について研究しているのだが、「仏教的」云々といった議論があるので。第二に、クレメンスがギリシア哲学から様々な教説を借用・剽窃しているという趣旨であつたが、確かフィロンあるいはユスティノスにも同様の議論があつたように思う。

クレメンスの議論と彼ら先行者との議論は関連があるのだろうか、あるとすればどういう関係があるのだろうか。

第三に、天使論についてであるが、こういう知識はクレメンスが相当オリジナルなものとして語っているのか、それとも初期ユダヤ教の伝統に基づいて、そこから知識を得てそういった天使論を展開しているのか。

### 久山宗彦

さきほど哲学の源について引用させていただいたが、あそこは『ストロマテイス』の一、一五、七一、三一五の全部の引用であった。クレメンスはアテナイから真理を求めての旅に出掛けてアレクサンドリアにやって来て、師となったパンタイノスに会ったということだが、パンタイノスという人は、何も書き物を残していない。クレメンスはおそらくパンタイノスから教えられたことをも自分の書物に取り入れて書いているのではなからうか。パンタイノスはインドまで行ってきたということも言われている。パンタイノスを通してインド思想を学ぶということもあったであろうし、当時アレクサンドリアは貿易の中心地で、インドの商人がどんどん当市に出入りしていた。インドーアレ

クサンドリアというルートがあった。商業活動を通してインドの思想が入ってきたという点があると思う。

第二点、クレメンスの剽窃・借用の問題についてであるが、『ストロマテイス』やその他の著作のなかで彼はフィロンについて述べていて、フィロンにそって同じように言っているところもある。従って、フィロンについて（私は一般的な知識しか持たないが）クレメンスの中ではそういう評価がなされているし、一般的にはフィロンや、その他、先駆者たちとの関係は当然考えられる。

第三に、クレメンスの天使論、天使と哲学との関係についてであるが、私の方では、ユダヤ思想の影響はあると考えられるが、はっきりとギリシア哲学に対する特殊啓示という形で天使を持ち出すのはおそらくクレメンスが最初であると思う。

### 高橋雅人

剽窃と *philantia* (我欲) との関係についてであるが、「剽窃という行為そのものから我欲が生ずるのではなく、剽窃していることに自ら気づかないことにより我欲が生ずる」とおっしゃったと思う。この点は非常に興味深く思わ

れたのだが、現代でも、小説家が何か著作権を侵したといふことが時々事件になる。その場合、彼らは著作権法に抵触して引用しているのを自分で知っている。だからこそ罪が問われるので、むしろクレメンスが言っていることは逆のような気がする。つまり、自分が何をしているのかわらないということが我欲という悪しき状態に陥っているといふことになる。その自己についての無知ということと、我欲との関係について、もう少し彼が語っているところがあるかどうか。

もう一つは、ギリシア哲学、特にソクラテスのことを考へると、「自分が何をしているのか知らない」とか「自分が知らないのに知っていると思つている」といった、まさに「無知の知」と言われることがもし哲学の出発点だとすると、ギリシア哲学全体が旧約に依存しているながら、それを知らないということは、ギリシア哲学に対する痛烈な批判になっていると思う。クレメンスがそれをなしたのとは、何によるのだろうか。

### 久山宗彦

philantos という形容詞ならば、一般的には「利己的な」

という意味になり、*philaunia* ならば「我欲」ということになるが、元来は「自愛」というのが原意であろう。この「自愛」ということをクレメンスは他の箇所では天使あるいは神の方から与えられているということを「忘れてゐる」、すなわち、「忘恩」と捉えている。先程おっしゃったとおり、クレメンスは「ギリシアの哲学者たちは恩知らずな剽窃をやりながらそれを知らず、自分たちがそれを固有のものとして見つけ出した」と言う。この点で「自愛」ということとつながってゆく。

クレメンスは「ギリシアの哲学者たちはさらにこれを変形させ、元の真理をかなり変形させるが、神の方はそれを非難なさるのではなく、そうさせたまま、最終的にどこからその源がきたかをはっきりさせ、そこへ位置づけてゆく、すなわち旧約聖書とギリシア哲学との関係を裏付けてゆく」といったことを述べている。この点がクレメンスの大きな目的であつたと思う。クレメンスは *philaunia* を自愛ないし忘恩と理解してゐるのではないか。その問題は『ストロマテイス』六、二以降、一五、六あたりに出てくる。

クレメンスの理解は、最終的には福音・受肉に結集させてゆくというあり方を見ている。旧約は新約の準備の段階

として「旧約から新約へ」というあり方が了解されており、その「旧約」への位置づけのうちにギリシア哲学が結集され、最後は福音につながってゆくという観点が彼のものとしてあった。

### 秋山学

多くのことを教えていただいた。二点ばかり質問させていただきたい。まず今日のお話では、クレメンスが旧約に照らしてギリシア哲学の剽窃あるいは借用を主張している、といった捉え方がなされ「文献年代学」といったことも引かれた。だが『ストロマテイス』第5巻などをよく見ると、「バルバロス」と呼ばれるユダヤ人たちの引用をする際に、旧約と並んで時に新約を引く箇所が見え、「旧約新約においてバルバロスはこう言う、ギリシア人はそれに依拠している」といった論法が見られる。文献年代的な観点から言えば、新約が出てくるのは妙であるから、むしろ霊的な意味において、「啓示の与えられている民がユダヤの民であって、そこにギリシア人の理性的な思考が依拠している」というふうにとった方がより整合性があるのではないだろうか。久山先生は全体をよく引いておられたので、どうお

考えになるかご教示願いたい。

第二に、今日結論として出されたのは「剽窃行為を行うギリシア哲学に対しても、キリスト教の方にはそういういったものとも和解してゆく素地を持っていた」というのがクレメンスの理解であった、といったものであったと思う。クレメンスの一見滑稽かつ単純なこのような「剽窃説」を、現代の例えば解釈学にすくい取ってゆく上で「予型的な視点の非常に素朴なあり方がここに認められる」といった捉え方をしたいのだが、その点に関してはどうお考えであろうか。そこから、ギリシア哲学などの理解に対する啓示の必要性あるいは有益性といった点も言えてこようと思うので。

### 久山宗彦

確かにいまおっしゃった通り、新約についても、時に旧約とともに述べられていて、なかなか整理が難しいということもあった。クレメンスの『ストロマテイス』は、最初に申し上げた通り、場合によってはそこだけで完結しているように見える文章がある。前後が矛盾した表現になっている箇所もあり、ストロマテイス（雑録）そのものだと

う感じがする。今日は、確かにそのところはカットした部分がある。最初のご指摘はその通りのように思う。しかし全体的に眺めた場合に、そういった箇所がそれほど問題にならないという印象である。

第二点、キリスト教の啓示には剽窃したギリシア哲学と和解してゆく素地があるということを経験したクレメンスが言いたかったということ全体として述べさせていただいたが、これはクレメンスの基本的な姿勢である。しかし、これも個々に読んでいった場合に、これと矛盾した言い方をしている部分も色々出てくる。ただ全体として『ストロマテイス』をそういう観点で見てゆくと、指摘したようになるのではないか、といった線を提示した。今後考えさせていただく。

### 阿部仲麻呂

いろいろと新鮮な発見をさせられるご発表であった。クレメンスの文章について、まだくわしく読んだことはないのだが、ヘブライズ的なものがヘレニズムにも影響を与えているということがわかって、これからもクレメンスの文章を読んでみようかと思った。『ストロマテイス』がど

ういう対象に向けられているのかをもう少し詳しく教えていただきたい。

キリスト教を周囲の異教から擁護する護教的な意味があったて書かれたものが多いと思うが『ストロマテイス』は誰を意識して書かれたものだろうか。

第二点目として、クレメンスは「ギリシア人がヘブライズ的なものを剽窃している」と言っているが、実際歴史的に見て、プラトンなどは旧約聖書に触れているのかどうか、あるいは、ギリシアの哲学者たちは口伝えに旧約聖書のことを聞いて、それを取り入れているということはありうるのだろうか。

### 久山宗彦

先程も申し上げたとおり、クレメンスは一六〇年頃からの人なので、キリスト教が土着しつつある時代の人であった。迫害はキリスト教徒に対して既に起こっていて、最後は彼も殉教して亡くなったと言われている。そういうところで、当然様々なキリスト教以前の異教の神々や、ローマ帝国の時代であるから皇帝崇拜が強要されたりした、そういう時代であった。そこでクレメンスは敢然とアレクサン

ドリアにいたギリシア人に向かって——そのギリシア人は徐々にエジプトの奥に入って教会をつくったが——、まず、キリスト教の素朴な信仰とはどの点にあるのかをはっきりと示す。

いわゆる超越的な唯一の神、そしてその方の子の受肉を浮き彫りにする一方で、偶像崇拜を徹底的に破壊してゆく、それが最初の『ギリシア人への勧告』のなかで述べられている。それが定着した後、キリスト教的な生活が形成される。

最後に、確固とした信仰を迫害時代にキリスト教徒は持つていなければならないということで『ストロマテイス』が記される。クレメンスはギリシア哲学に通じており、その哲学思想を大いに活用して、基本的にはキリスト教の信仰のなかで哲学を位置づけ、信仰に従うグノーシスという線で論じている。『ストロマテイス』に記されている深いいろんなテーマは、信仰を取り入れた人がその信仰を固めてゆくために勉強すべきテーマとして記されている。

アレクサンドリアの問答学校は、当時、ギリシア哲学、キリスト教信仰、哲学から信仰へ行く流れ・道を非常に高度に教えていた。そこで勉強した人々から殉教する人も何

人も出たということ、信仰につながる哲学の勉強という意味を持ち、その点、学校には意味があった。であるから誰を対象にしているかと言えば、キリスト教の信仰を深く確固としたものにしてゆく人間をつくるために、キリスト教徒に対してこの書物を勧めたのではないか。

二番目は剽窃の問題であるが、プラトンが実際にユダヤ教的なものに出会っていたかと言えば、クレメンスの時代、クレメンスはもちろん、フィロンとかユスティノスとかエイレナイオスなど様々な人がいるが、彼らは共通して、特に律法・モーセの思想をプラトンが剽窃しているという点を強調する。言葉がそのまま書き換えられているという点もフィロンなどは指摘しているが、全体的に見た場合には「テーマ全体の中身について、旧約聖書とギリシア哲学で問題になっている箇所は基本的に同じである」という言い方がなされている。同時に一抹の不安も残っている、といった文章を『ストロマテイス』のなかにも探すことができる。「全体的にはそう言える」といった印象である。

#### 泉治典

今の二番目の問題についてであるが、ギリシア哲学と、



ヘブライズムを含むオリエンタリズムについての実証的な研究はいくつかある。例えばヘシオドスの「五時代説」と近東のそういった神話との関係については、邦語でも久保正彰氏のもの（『ギリシア思想の素地』岩波新書）などがある。その他ヘラクレイトスの火とか、プラトンのエルの神話など様々な点に関して、断片的ではあるがギリシア哲学とオリエンタリズムに関する実証的な研究が存在する。紀元後になって、例えばウエルギリウスの『牧歌』に出てくるある種のキリスト予言的なもの——これは先程言及のあった「予型論」といった問題に関係する——の関わりも十分に考えられる、ギリシア哲学と旧約聖書、エジプトやカルデアの思想との関係といった問題は、単なる観念的な問題ではなく、現実的な問題であったということが出来る。両方の思想が渦巻いている世界のなかで、キリスト教神学の道筋を立ててゆく上に、キリスト教的グノーシスを明らかにしていったという点はクレメンスやオリゲネスの大きな功績であると同時に、後の神学にとっては非常に問題になるところだと思ふ。

それらの点を一方からだけ切ってしまうのではなく、広く問題として考えてみるということは、われわれの思想を

豊かにする上で非常に有益であると思ふ。これまで「キリスト教的グノーシス」という問題と正面から取り組んだ方はあまりおられないようであるし、この問題を非常に大きな問題として取り上げる方が出ていただければ。

#### 片岡力

クレメンスの思想において歴史というファクターが持っていた重みというのは、思っていたよりも小さくないと思われた。クレメンスの「歴史哲学」とまでは行かないまでも、ある種の「歴史認識」と言える構造があったということとはできるのであろうか。

#### 久山宗彦

基本的にあると思ふ。古いもの新しいものというような、単純な発想と言えども言えるような年代学的な面も出てくるが、大まかに言って、ヘブライズム・ヘレニズムの滔々とした流れが、どのように基本的に位置づけられてゆのかという問題をめぐって、当時はヘレニズムだけではなく色々な思想的な流れがあったわけだが、その中で特に選ばれたヘレニズムへの土着がなされ、抜き込んで充実し

た流れとしてヘブライズムがあったと言える。いわゆる旧約の流れが新約キリスト・イエスにおいて、ヘレニズムのなかに入り、流れ込んできたという認識がクレメンスにあったと感じ取れる。つまり、キリスト・イエスの受肉というところで、二つの流れを究めてゆくのが、クレメンスの趣旨ではなかったかと考えられる。

第七九回教父研究会

(一九九七年一月二五日 於聖心女子大学)

司会者 加藤信朗 (東京都立大学名誉教授)

泉 治典 (東洋大学名誉教授)

発表者 久山宗彦 (星美学園短期大学学長)

発言 高島慶子 (立教大学大学院)

戸田 聡 (一橋大学大学院)

高橋雅人 (神戸女学院大学)

秋山 学 (筑波大学)

阿部仲麻呂 (上智大学大学院)

片岡 力 (栄光教育文化研究所)

◎討論の記録については、論旨を明確にするために、多少表現を改めた箇所があります。

大変遅くなりましたが、『パトリステイカ』第4号を刊行する運びとなりました。

本号は「ギリシア教父特集」です。

本誌『パトリステイカ——教父研究——』は、教父研究会(代表加藤信朗)の機関誌で、年一回発行されています。掲載内容は、年四回の定例研究会(現在は聖心女子大学で開催)での口頭発表を基にした論文と、発表に引き続いて行われる質疑討論を収録したものです。わが国における唯一の教父研究誌として、論文はもとより討論での発言も、教父研究の最新の状況と水準とを反映したものになるよう努めております。なお、研究会は一九九八年四月に第八四回を迎えていて、本誌に収録されるまでの活動については、第一号巻末に一覧表を掲げてあります(中世哲学会編『中世思想研究』XXXVII(1995) p.174-5には、代表者による活動紹介が掲載されています)。

なお、今年五月現在、教父研究会事務局は、筑波大学文学・言語学系、西洋古典研究室に置かれています。また次号は「ラテン教父特集」の予定です。

(秋山学 記)